

けふばあちゃんからの手紙(5)

— 一郎くんへ —

(じゃりんこ文庫 乾 京子)



毎日毎日、とろけてしまいそうなくらい暑い日が続いています。お元気ですか？先日、何年振りかでお母さんにメールしたら、一郎君がパパになったと聞きました。おめでとうございます。そうですね、一郎くんが文庫に来ていたのは、もう、20年以上も前のことになりました。けふばあちゃんは、いつまで経っても幼稚園、小学生、中学生の頃の一郎くんの顔が浮かびます。弟の治郎君と山田さん兄弟と一緒に来ていましたね。その後、妹のマコちゃんも加わって、あの頃の「じゃりんこ文庫」は、ごったがえしていましたね。

一郎君が、5年生か6年生の時の夏休みの文庫の日のことでした。
「おばちゃん、これ。文庫へプレゼント！」
と、お父さんにもらった建築の廃材で作った「すのこ本立て」を持ってきてくれました。
「ええ～っ、これ、一人で作ったの？持ってくるのも重かったでしょう。」
「学校の夏休みの宿題が『人に喜んでもらうことをする』っていうので、じゃりんこのおばちゃんに喜んでもらえるかなと思って」
「ありがとう！本当にありがとう。とってもうれしいわ。きっと、みんなも喜ぶよ」
20年以上経った今も現役で使っています。



毎月テーマを決めて、書架の中から絵本を選んで、表紙見せの絵本や児童書の展示に使っています。季節の絵本や、「たびだち」「雨・水」「植物」「月・宇宙」「収穫」「みどりの本」「赤い本」「青い本」「黄色の本」「昔話の本」……いろんなテーマで、展示してきたなあ。今はね、こんなの。7月8月、テーマは夏休み。



見覚えのある本はありますか？

秘密基地やキャンプ、自然と人間。

8月、戦争と平和についてもね。

自由研究の参考書も。

そうそう、毎年の夏休み最後の文庫は、「かがくあそび」

一郎君がすのこ本立てを持ってきてくれた時の年は、

調べてみたら、「お金の消える貯金箱」でした。

今年も、同じだったんだよ。



作家がテーマの時も、アンソニー・クイン、赤羽末吉、バートン・クライドルフ・エッツ・林明子・さとうわきこ…

ねっ、大活躍でしょ。この中から選んで、持って帰る子も多いんだよ。

以前は、文庫が終わると片付けていたんだけど、今いるネコの糞はふすまを爪とぎの場所だと思っていて、それを防ぐのに、出しっぱなし。油断すると、ガリガリ、ガリガリ…リビングの壁紙も糞に引っかかれて、もふあもふあ状態。あの頃は、三毛猫のユウちゃん、あの子は、網戸もガラス戸もふすまも、自分で開けて出ていったね。



「じゃりんこ文庫日誌」を広げてみたら、一郎君の「すのこ本立て」プレゼントは、日誌のNo.2にできました。その半年前、けふばあちゃんがアヤハから350円で買ってきたすのこに棚用の木の棒をのこぎりで切ったり、くぎを打ちつけたり、そうやってすのこ本立て作りの中心になってやってくれたのが、一郎君でした。

本立て作った後、公園で拾ってきたフウの実に黒ペンキのスプレーをかけて、マックロクロスケも作っていたんだ。(ああ、そんなこともあったなあ)って思い出してきた。

作業をガレージでやっていたんだけど、

ペンキが乾くのを待っている間、残った木切れを片付けたり、弟くんや友だちとふざけ合っている時、一郎君が残りのペンキで、ガレージのコンクリーの上に、〇〇！と落書きをしました。いつも大人しくて口数の少ない一郎君、一瞬？、(どうしたのかなあ？)、その文字を見た時はびっくりしました。でも、やっぱり、その半年前、3人目の妹君が生まれてから、おかあさんはこんなことをおっしやっていました。



「実家も遠くて、母にも頼れないので、ついバタバタしてしまっ、一郎には、いつもお兄ちゃんであることを押し付けてしまっているんじゃないかなあって、気にしてるんです。あの子にがまんをおしつけてしまってるんじゃないかなあって」

その時の日誌に「おかあさんは、とても気にしていらっしゃるが、彼女の優しさは、絶対伝わっていると思う。たっぷり時間のある時の一郎君は、本当に優しい目で妹を、おかあさんを見ている」

ふっと、そのことを思い出して、思わず心の奥に閉じ込めていたモヤモヤしたものが、とびだしたのかもしれないなあ。吐き出せてよかったなあ。……と、その時思いました。

「いいよ、いいよ。そのうち消えるやろ。こすると広がるから、そのままがいいよ」

そんなことのあった後の一郎君の『人に喜んでもらう』プレゼントは、二重三重にうれしいことでした。



文庫の遠足で、大阪の万博公園に行った時のこと覚えていますか？「大阪国際児童文学館」で、円形書架の所に座り込んで、漫画を読んだり、玄関を出たり入ったりして、ピンポン、ピンポンと来館者数の数を増やしたり（頑張ったけど、橋本府政時、閉館になっちゃったね）国立民俗博物館で、世界一周。西アフリカのお話も聞いたね。言葉は分からないのに、なんだかおかしくて笑っちゃった。織物の体験もしたかな？

一郎君は、少年野球をやってたんだよね？



お弁当の後は、お友達と走り回っていたような気がします。

相模川の遠足で、ネーチャーゲームをしたのも記憶にあるでしょうか？

まだまだ、次々と思い出してきました。

でも、次は治郎君やマコちゃんへと繋ぐことといたしましょう。

最後に、パパになった一郎君へ

けふばあちゃんの大好きな尊敬する石井桃子さんのことばを贈りますね。

「じゃりんこ文庫」は、このことばがベースになっています。

子どもたちには、子どもとして子どもの時間を精一杯生きてほしい！そう思っています。

一郎君も、おとうさんやおかあさんに見守られて、そういう時代を過ごして、現在(いま)があると信じています。

今度は、坊やにそんな子ども時代をね。

けふばあちゃんより(2025年の夏)

